2026年1月25日 南板橋教会 主日礼拝　降誕節　第5主日 週報番号3500号
説教題：「**キリストによる救いの定め**」
聖書箇所：テサロニケの信徒への手紙Ⅰ　5章1-11節
説教者：秀島行雄牧師　招詞：讃美歌93 - 1 - 26　交読詩編：詩編119編145 - 152節（139頁）
讃美歌：83／189(ちいさいこどもの)／474(わが身の望みは)／508(救い主 イェスこそは)／27
「今週の聖句」〔神は…わたしたちの主イエス・キリストによる救いにあずからせるように定められたのです。〕（テサロニケ前書5：9）
「牧師室の窓」「正月に今年の願い文字に書く主の恵み受け一歩歩まむ」
「小学の４年の孫の初賀状一字一字の文字の黒さよ」

(1)皆様おはようございます。1月20日の「大寒」を迎えてから寒波の日々が続いています。皆様は如何お過ごしでしたでしょうか。北国では、雪が降ると言うよりは、粉雪が舞い上がるという方が合っています。一晩で1mを超える雪の高さになることもありました。
日曜日の朝は教会に早く行き、力を合わせて雪かきをします。夫々の体力に合わせて、個々人の事情に合わせて、無理のない範囲内で、出来ることをしました。作業を終えて、礼拝の15分前には礼拝堂の椅子に座り、これから始まる礼拝に心の準備をして待ちます。礼拝の時間は1時間半程の僅かな時間ですが、その僅かな時間のために、1週間の生活を自分なりに組み立てるのです。
その組み立て方は、1つには、出席できるように工夫し、知恵を出します。ご家庭によっては、日曜日に朝早くに家を空けることに協力を得られない方もおられました。だからこそ、工夫し、知恵を絞るのです。
2つには、健康を整え、仕事の調整をします。天気予報を事前に調べておくことが大切です。その様なことを工夫し調節して日曜日の礼拝に集まりますので、礼拝前の受付で出席の名前を書くことが嬉しく、清々しいのです。受付で交わす「お早うございます」の声は、挨拶であるのみならず、1週間を工夫して出席された事への、応援のエールでもあるのです。おはようございますと、互いに交わす応援のエールが、僅かな時間の礼拝をより豊かにしていきます。
(2)礼拝は、司式者による聖書朗読を聞く、牧師による説教を聞く、一方通行の行動の様に受け取られますが、そうではありません。聖書朗読を聞く、讃美歌を歌う、説教を聞く一人ひとりの態勢が整っているからこそ、聖書の言葉が、説教の言葉が伝わってくると言えましょう。
そのことのみならず、1週間の生活時間を工夫して出席したこの礼拝の時間を無駄にすることなく、活かすことが、次の1週間の日常生活を豊かなものとする見えない原動力になります。礼拝の終わりに、牧師が「派遣の言葉」を伝えています。「平和のうちに、この世へと出て行きなさい。主なる神に仕え、隣人を愛し、主なる神を愛し、隣人に仕えなさい。」この言葉を単なる儀式上の音声と受け取るか、或いは、ご自身への応援として受け取るかは、大きな違いとなります。
前置きがやや長くなりましたが、物事をどの様に理解し、判断するかと言うことは、今日の聖書箇所が語っていることに他なりません。今までお話ししましたことは、今日の聖書箇所を読んでいくための準備体操と言えます。そうです、準備体操、事前準備が大切です。
(3)きょうの聖書箇所の5章1節2節を見てみましょう。〔(5:1)兄弟たち、**その時と時期**についてあなたがたには書き記す必要はありません。(5:2)**盗人が夜やって来るように、主の日は来るということを、あなたがた自身よく知っているからです。**〕この２節に「**主の日は来る**」と書かれています。「**主の日**」とは２つの意味があります。
1つは、旧約聖書に書かれている様に「神が行なう審判と救いの日」です。イザヤ書13章6節（1080頁）、「泣き叫べ、**主の日**が近づく」、同じくイザヤ書13章9節（1080頁）「見よ、**主の日**が来る…大地を荒廃させ、そこから罪人を断つために。」、エゼキエル書30章3節（1344頁）「その日は

近い。**主の日**は近い。それは密雲の日、諸国民の裁きの時である。」、アモス書５章18節と20節(1435頁)「(5:18)災いだ、**主の日**を待ち望む者は。**主の日**はお前たちにとって何か。それは闇であって、光ではない。…(5:20)**主の日**は闇であって、光ではない。暗闇であって、輝きではない。」マラキ書3章23節(1501頁)「(5:20)見よ、わたしは／大いなる恐るべき**主の日**が来る前に／預言者エリヤをあなたたちに遣わす。」

以上の様に書かれている通り「**主の日**」とは恐ろしい審判の時、滅亡の時と理解されていました。併し、パウロは180度変化した理解をしたのです。例えば、新約聖書のコリント前書5章5節(304頁)「…それは**主の日**に彼の霊が救われるためです。」パウロの理解力、加えて、判断力に驚かされます。

ユダヤ教に生きる人々にとっては「恐ろしい審判の時、滅亡の時」との理解が、全く逆の「霊が救われる日」と理解したのです。今日の聖書箇所は「**主の日**」に対する人々の理解をパウロが変化させる、まさにその場面と言えましょう。パウロは何故このように180度変化した理解を、物事を一面だけではなく多面的に見ることが出来るようになったのでしょうか。それは「回心」したから、言葉を変えて言えば、「主の呼び掛けに誠実に生きよう」としたからだと私は思います。「主の言葉」を右から左に聞き流したのではなく、受け止めて、自分なりに考えることを繰返し、繰返し行なったからだと考えられます。

(4)「**主の日**」の**2つ目の意味は、**キリストの復活の日を示しています。新約聖書ヨハネの黙示録1章8節9節10節(452頁)です。「(1:8)神である主、今おられ、かつておられ、やがて来られる方、全能者がこう言われる。「わたしはアルファであり、オメガである。」(1:9)わたしは、あなたがたの兄弟であり、共にイエスと結ばれて、その苦難、支配、忍耐にあずかっているヨハネである。わたしは、**神の言葉とイエスの証し**のゆえに、パトモスと呼ばれる島にいた。(1:10)ある**主の日**のこと、わたしは“霊”に満たされていたが、後ろの方でラッパのように響く大声を聞いた。」

そして、ヨハネの黙示録の最後22章20節21節は次の様に終わっています。「(22:20)以上すべてを証しする方が、言われる。「**然り、わたしはすぐに来る。**」アーメン、**主イエスよ、来てください。**(22:21)**主イエスの恵み**が、すべての者と共にあるように。」初代教会では「**主の日**」が慰めの日となり、「**主の日**」を待つ信仰が人々に生きる力を与え続けたのだと考えられます。

序で乍ら、今日の聖書箇所第1節に「**その時と時期**」と翻訳されている言葉のギリシア語の χρονος(クロノス)とは時の長さ、時間、期間、時代と言う意味であり、καιρος(カイロス)とは特定の時、ちょうどよい時と言う意味です。英語の翻訳では「the times and the seasons」と訳されています。日本語で「春夏秋冬」の「秋(あき)」と言う字を書いて、「秋(とき)」と読む場合があります。「重要な時」と言う意味です。

(5)3節を見てみましょう。〔(5:3)**人々が「無事だ。安全だ」と言っているそのやさきに、突然、破滅が襲うのです。**ちょうど妊婦に産みの苦しみがやって来るのと同じで、決してそれから逃れられません。〕ここには「**突然、破滅が襲う**」と書かれています。併し、本当に突然なのでしょうか。旧約聖書創世記の**ノアの箱舟の物語**では、神が「洪水」を起こす前に人々に対して警告の期間を設けましたが、人々は耳を傾けることはありませんでした。

また同じく繁栄していた古代都市**ソドム滅亡**防止のために、アブラハムは神に対して食い下がるように執り成しをしましたが、人々は自らの享楽生活を顧みることなく、滅亡してしまいました。

私たちは「**無事だ。安全だ**」と言うことを何度でも確認しなければなりません。行なったことに対して、現状に対して、多角的に事後検討し確認する必要があります。

以前に、「指差し確認」の重要性を申し上げましたが、私の職場勤務時代に「ストレス・テスト」がありました。「ストレス・テスト」とはある負荷がかかる、危機が発生した時に正常に作動するかどうかと言うテストです。金融・建設・コンピューター・病院で行なわれており、東日本大震災による原子力発電所の再稼働審査にも行なわれています。加えて、東日本大震災からの復興と言う観点からは、英語の“resilience(レジリエンス)”と言う言葉が注目されました。「回復力・復元力・弾力性・精神的回復力」と言う意味です。
危険要因と守るべき要因を見極めて、困難やストレスを乗り越えて回復す、社会環境への適合を目指す努力と言えます。会社や組織団体だけではなく、個人や家庭にも求められる考え方です。教会でも、北支区も、東京教区も、日本基督教団でも、研究すべきテーマであると思います。
パウロは2千年前に、既に危険に対する「観察力・発見力・対応力」が大切・重要であることに気が付き、テサロニケ教会の人々に伝えていたと、読むことが出来そうです。聖書を現代の視点で読むと大きな興味が湧いて参ります。
(6)その様に読んで参りますと、4節5節6節は理解し易いです。〔(5:4)**しかし、兄弟たち、あなたがたは暗闇の中にいるのではありません。ですから、主の日が、盗人のように突然あなたがたを襲うことはないのです。**(5:5)あなたがたはすべて**光の子、昼の子だからです。わたしたちは、夜にも暗闇にも属していません。**(5:6)従って、ほかの人々のように眠っていないで、目を覚まし、身を慎んでいましょう。〕
パウロは言っています。あなたたちが自分自身の立ち位置をしっかりと理解するならば、「**主の日**」が突然に起きても狼狽(うろた)えることがないのです。「目を覚まし」とは即座に反応することが出来ることに他なりません。
8節には興味深い言葉が続いています。「**信仰と愛を胸当てとして着け、救いの希望を兜としてかぶり、身を慎んでいましょう**」ここには、当時の戦闘武具を例にして分かり易く「**信仰と愛**、**救いの希望**」とは何であるのかを伝えています。よく似た表現が旧約聖書イザヤ書59章17節(1159頁)に書かれています。〔(イザヤ59:17)**主は恵みの御業を鎧としてまとい／救いを兜としてかぶり、報復を衣としてまとい／熱情を上着として身を包まれた。**〕
今日の8節は、恐らくは、この世の人生を生きる上で、「洗礼」とは何かを分かり易く例えているものと考えられます。加えて、初代教会での信徒教育として暗唱していた言葉であったと思われます。
ここまで読んできますと、9節の意味が明らかになってきます。
〔(5:9)**神は、わたしたちを怒りに定められたのではなく、わたしたちの主イエス・キリストによる救いにあずからせるように定められたのです。**〕今日の聖書箇所の2節に書かれている「**主の日は来る**」の「**主の日**」とは危険でもなく、「**破滅**」でもありません。「**イエス・キリストによる救い**」を私たちが受けるための**道筋・手順・設計図**であると理解することが出来るのです。
10節には「**わたしたちが、目覚めていても眠っていても、主と共に生きる**」と書かれているこのことは、「**信仰**」による「**救いの希望**」は「**目覚め**」や「**眠**」りに拘わらず、「**主と共に生きる**」ことが可能となる効果を発揮すると言っているのです。
11節は一人では行なうことが困難であっても、よくよく考えて互いに協力・切磋琢磨を持続・継続することが不可欠であるとパウロは言っています。11節〔(5:11)ですから…**励まし合い、お互いの向上に心がけなさい。**〕パウロと言う人は、苦労を重ねてきた人でしたので、聞く人の心に響く話で語り掛けていることが、今日の聖書箇所から感じ取ることが出来ます。もう一度お読みします。「**励まし合い、お互いの向上に心がけなさい。**」

・・・**お祈りします**。イエス・キリストの主なる神様。
私たちはあなたの御恵みによって生かされていることに感謝いたします。
主イエス・キリストのお誕生を迎え、新しい年として第4回目の主日礼拝を迎えました。寒い季節を過ごしています。これからの1年間の日々をお導き下さい。
人生の安らかな時にも辛い日々にも、あなたに向かって祈ることが出来ます様にお支え下さい。
神が創造されましたこの地球上に生きる一人一人に平安・平和・希望が与えられますように。
この地球上では、武器・武力による脅迫と暴力が行なわれる状況になっています。
食べ物が乏しい人々に、災害や戦争の只中にある一人一人に慰めがありますように、お守りください。私たちに知恵と勇気をお与え下さい。…教会に連なる一人ひとりに、地域で生活している一人ひとりに、主なる神の御恵みと平安がありますように。
イエス・キリストの御名によって祈ります。　**アーメン**